マス・メディアの AIDS の取り扱いに関する研究 —1982年から1992年までの新聞記事の内容分析—

平田 繁* 渡邊 正樹* 勝野 眞吾*

AIDS in the Japanese Mass Media: Content Analysis of Articles about AIDS from 1982 to 1992 in the Japanese Newspaper

Shigeru HIRATA*, Masaki WATANABE* and Shingo KATSUNO*

We undertook a content analysis of articles mentioning HIV/AIDS from 1982 to 1992 in *the Asahi Shinbun*, a national daily newspaper in Japan. We also examined what influence the articles may have had on people's health behavior.

The findings of this study are as follows:

1. A total of 1381 articles about AIDS were found in the newspaper between 1982 and 1992. In particular, articles in 1987 and 1992 were large in volume.
2. The proportion of content categories had changed during the eleven years. In 1987, the category about AIDS-related studies was the largest in article volume, while the category about AIDS education and other preventive activities stood first in 1992. Both categories accounted for almost 50% of the total articles during the period.
3. The countries which were the major focus of the articles were the United States and countries in Europe. However, articles about AIDS in Japan gradually increased.
4. The change in article volume about AIDS was not associated with the number of HIV infections in Japan, but there seemed to be a connection between the article volume about AIDS and the number of visitors at health centers for anti-HIV testing or counseling.

Key words : AIDS, mass media, newspaper, content analysis

AIDS, マス・メディア, 新聞, 内容分析

I 緒 言

今日、テレビや新聞、雑誌等で AIDS に関する

報道が盛んに行われている。また、特集が組まれることも多く、AIDS は今、最もマス・メディアの注目を集めている事柄の一つである。これは次の

---

* 兵庫教育大学 疫学・健康教育学研究室

* Division of Epidemiology and Health Education, Department of Health Sciences, Hyogo University of Teacher Education

ような要因によるものと考えられる。

第一に、AIDS という病気の特異性からである。病原ウイルスは確定しているが、発病予防方法や治療法が確立していないため、発病したときは致命的となる。また、感染しても無症状の期間が長く、検査を受けないと感染しているかどうかわからない。さらに AIDS は、感染していた場合、性交渉を通じて感染者は自分の周囲の人、特に親しい人に感染させてしまう危険性を持つからである。

第二に、AIDS の流行の現状からである。日本では、当初 AIDS 罹患者の大部分を血液製剤による血友病患者が占めていたが、今日では、AIDS は、異性間性的接触による感染が主流となり、増加傾向にある。また、母子感染の事例も数例報告され、感染者の地域分布も1991年からは全国に広がっている。すなわちわが国の AIDS 流行には、一般化と拡大化傾向がみられ、AIDS 感染がより身近なものとなっているからである。

第三に、健康情報は、マス・メディアのニーズ拡大に寄与することが大きいからである。特に AIDS に関しては、「性に関する問題」であることから、一般に医者等の専門家に相談しにくいので、マス・メディアからの情報に頼る傾向がある。総理府（1987）によれば、エイズに対する見聞について、マス・メディアを挙げた人の割合は高く、新聞については、82.3%である。

このようなことからマス・メディアにおける AIDS の取り扱いは、量的にも質的にも拡大傾向にある。このような現状の中でマス・メディア、中でも新聞における AIDS 報道は、国民の AIDS に対する知識の普及等に大きく影響するものと考えられる。しかし、新聞の AIDS 報道を内容分析により客観的に評価、検討した例はまだ少ない。海外においては、Lupton（1992）や Lupton ら（1993）、Herzlich ら（1989）などの研究が見られるのみであり、わが国においては、まだその報告例はない。そこで、本研究では、代表的な全国紙とされる一新聞を取り上げ、1982年から1992年の11年間に扱われた AIDS 報道の内容分析をし、

AIDS 報道の量的、質的検討をした。そして、わが国のマス・メディアにおける AIDS の取り扱いの特徴を明らかにすることを試みた。

II 対象および方法

1. 対象

1) 対象紙

新聞の発行部数のうち約半数が一般紙の全国紙で占められている。山本ら（1987）によれば、全国紙の8割は、朝日、読売、毎日新聞で占められているとされている。そこで、発行部数が多い三紙を対象紙として選定し、1991年の AIDS の報道の件数、記事量、内容別報道量、地域別報道量、及び月別記事件数の比較検討を行ったが三紙に差は無かったので、以下の分析では、件数・記事量が他紙よりも多く、しかも一般的に全国紙の代表とされている朝日新聞を本研究の対象紙とした。

2) 対象記事

朝日新聞記事データベース及び朝日新聞縮刷版の目次で「エイズ (AIDS)」と「HIV」のキーワードが扱われている1982年から1992年までの朝刊・夕刊記事全てを抽出した。そして、朝日新聞縮刷版でその記事を探し、見出しにキーワードがついている記事（地域版を除く）のみを対象とした。従って、関係があると考えられる記事でも、見出しにキーワードがなければ対象から外した。ただし、見出しにキーワードが無くても、キーワードが見出しに付いた他の記事と同じ箇所に関連して掲載されているものは対象とした。

2. 分析方法

ある事柄に関する報道、ことに世の注目を集めるような事柄についての報道では、報道の公正さや責務が強調されても、いずれも単なる印象であるために、センセーショナリズムや偏向を含む危険性を排除することができない。そこで本研究では、内容分析 (content analysis) を用いて、報道の内容を科学的に分析し、客観的に評価し、報道内容の実態を明らかにするものである。そして、以下のような規準、分類を設けて内容分析を行った。また、AIDS 報道を他の病気の報道と比較する

事によって、病気の現状がそのまま新聞報道に現れているかを検討した。

1) 件数の規準

記事件数の単位は、新聞記事データベース及び縮刷版の目次の1項目を1件とした。特集などで「エイズ (AIDS)」と「HIV」のキーワードが見出しに付いている記事が多数あっても、データベース及び縮刷版の目次で1項目として扱われている場合は、1件とした。また、一つの記事で二つや三つの内容や国の話題を取り上げている場合の件数については、それぞれ1/2件、1/3件で処理した。

2) 記事量の規準

新聞は原則として各頁の段数や各段における一行の字数、各段の行数が決まっているので、各段の行数を測れば記事量を測定できる。そこで、縮刷版（実際の新聞の半分位の大きさ）の記事の行数をものさしで測り、コラム・センチで表示した。また、見出しは、記事の内容を簡潔に表現したものであるし、見出しが大きいということは、新聞社が編集上その記事の内容を重視していることを意味し、読者の眼に留まるかどうかに影響すると考えられるので見出しのスペースも全て記事量とした。さらに、一つの記事で二つや三つの内容や国の話題を取り上げている場合の記事量については、記事量を1/2、1/3ずつにしてそれぞれ処理した。

3) 紙面別分類の規準

1982年から1992年までの全 AIDS 記事に目を通し、どの紙面でエイズ記事がよく扱われているかを配慮しながら、堀江（1988）の分類を参考にして次のような規準を設定した。

朝刊は、「一面」、二・三面の「総合」、読者の声の「声」、「国際」、「経済」、第二社会、第三社会を含む「社会」、「その他」の7項目に分類し、コード化した。

夕刊は、「一面」、二面の「総合」、科学関係の記事を中心に掲載している「科学」、「社会」、「その他」の5項目に分類し、コード化した。

4) 国別分類規準

国際ニュースは、特派員や通信社が配信してい

る。その配信された国別に分類した。しかし、配信された国によらずとも他国のことを取り上げている場合もあるので、1982年から1992年までの AIDS 記事を読んで分類した。そして、WHO が発表したことについては「WHO」という項目を、すべての国に関係のあるものは「世界」という項目を設定し、「ヨーロッパ」、「アジア」、「アフリカ」、「アメリカ」、「オセアニア」、「日本」の8項目に分類した。さらに国別に細分化し、コード化した。

5) 内容別分類基準

1982年から1992年までの全 AIDS 記事に目を通し、AIDS 記事の内容と辻村ら（1987）の分類を参考に、報道内容の分類を「研究」、「医療倫理」、「偏見・人権問題」、「医療事故・事件、及び訴訟問題」、「制度」、「経済問題」、「健康教育・予防対策」、「報告」、「その他」の9項目とした。さらに細分化し、コード化した（表1）。そして、どの記事がどのコードにあてはまるかについては、本研究者と共同研究者が主と副に分かれ、別々に全エイズ記事に目を通し、その後一つずつ確認し合い、意見が分かれた場合には再度記事を読み直して、話し合いで決定するようにした。また、該当する項目がない場合は、新しい項目を設定するようにした。

6) 他の病気の記事との比較

国内の病気の現状及び、AIDS が感染症であるということから、国内でも死亡数・死亡率が高い悪性新生物、中でも割合が高い胃がん、及びわが国最大の感染症と言われる結核についての新聞記事を同様に分析し、AIDS 記事と比較を行った。

III 結 果

1. 朝日新聞 AIDS 報道の記事量

1) 1982年から1992年までの記事量・記事件数

1982年から1992年までの記事量は、20,714コラム・センチ、記事件数は、1,381件であった。記事件数と記事量の変化は、表2の通りであった。AIDS 報道が最初に行われたのは、1983年5月14日の夕刊で、1982年には行われていなかった。記事量が多かったのは、1987年と1992年であった。

表 1 内容別分類コード表(62項目)

1. AIDS に関する医学・技術の研究	5. AIDS に関する制度
1-01 治療薬・治療技術	5-01 医療(病院等)
1-02 研究に関する会議・シンポ・学会	5-02 保険(医療費一般)
1-03 医学・医療技術一般	5-03 検査制度
1-04 診療システム	5-04 医療制度一般(予防法案等を含む)
1-05 検査方法	5-05 制度に関する会議
1-06 感染者、患者数等の実態・調査・予測	5-06 医薬品・医療機器便宜、許可等
1-07 研究の予算	5-07 薬価
1-08 医学・医療の歴史	5-08 医療関係者を含む教育・養成
1-09 病因究明	5-09 出入国の制度
1-10 医療器具	5-10 感染者の補償対策・制度
1-11 臨床試験	5-11 その他
1-12 その他	6. AIDS に関する経済問題
2. AIDS に関する医療倫理	6-01 医療品メーカーの事業面
2-01 医療拒否	6-02 生命保険問題
2-02 人体実験	6-03 その他
2-03 医療倫理、患者の権利	7. AIDS に関する健康教育・予防対策
2-04 医療倫理に関する会議	7-01 予防・対処法等の知識
2-05 その他	7-02 教育(講演、公開講座等を含む)
3. AIDS に関する偏見・人権問題	7-03 キャンペーン(コンサート、展示、ポスター等を含む)
3-01 病気に対する偏見	7-04 本、雑誌、TV、VTR 等の紹介
3-02 プライバシー等の人権問題	7-05 健康教育や予防対策に関わる委員会・会議及びその設置
3-03 偏見・人権問題の対策	7-06 対策等に関わる予算
3-04 その他	7-07 輸血・献血、血液製剤対策
4. AIDS に関する医療事故・事件及び訴訟問題	7-08 相談・カウンセリング・検査
4-01 医療(輸血、移植等)	7-09 知識・意識調査
4-02 薬品(血液製剤等を含む)	7-10 企業等の対策
4-03 医師や患者	7-11 医療行為等に於ける対策
4-04 医薬品・医療機器メーカー	7-12 対策に関する意見
4-05 ニセ医者	7-13 その他
4-06 犯罪	8. AIDS に関する報告
4-07 研究	8-01 感染者、患者、死者の報告
4-08 感染者の性行為等	8-02 心中、自殺
4-09 その他	8-03 現状の報告
	9. その他
	9-01 人物の紹介
	9-02 その他

特に1987年の記事量は、前年の約5倍で5,415.5コラム・センチ、1992年の記事量は、前年の約3.6倍で6,080.6コラム・センチであった。1985年も前年の約5倍であった。しかし、1987年後は、1988年、1989年と年毎に半減していた。記事件数についても記事量と同様の変化を示していた。

また、各年の月別記事量・記事件数の変化も年によって大きな違いがあった。特に1987年は、2月に月の中では最高の1,193.9コラム・センチの報

道があり、その後12月にかけて減少していくという変化を示していた。

以上のように、1987年、1992年が多いなど、AIDS 報道は、年や月によって大きく違い、報道量は一定していなかった。

ところで、件数と記事量を比較した結果、その変化にほとんど差がなかったので、以下では主に記事量の分析結果について述べる。

2) 1982年から1992年までの朝刊夕刊の記事量

表 2 朝日新聞 AIDS 記事の年別記事件数・記事量

年	記事件数(単位:件)			記事量(単位:コラム・センチ)		
	記 事 件 数			記 事 量		
	朝刊	夕刊	計	朝刊	夕刊	計
1982	0	0	0	0	0	0
1983	20	12	32	194.5	143.1	337.6
1984	6	7	13	88.7	107.2	195.9
1985	34	43	77	491.4	483.1	974.5
1986	42	37	79	638.2	445.8	1,084
1987	183	201	384	2,540.1	2,875.4	5,415.5
1988	116	89	205	1,854.1	1,033.5	2,887.6
1989	30	45	75	382.9	463	845.9
1990	40	47	87	600.4	595.1	1,195.5
1991	50	59	109	821.4	875.5	1,696.9
1992	214	106	320	4,283.3	1,797.3	6,080.6
計	735	646	1,381	11,895	8,819	20,714

1982年から1992年までの朝刊の記事量は、11,895コラム・センチ(735件)、夕刊の記事量は、8,819コラム・センチ(646件)であった。朝刊・夕刊の年別記事量の変化は、表2に示す通りであった。

年別に朝刊と夕刊の記事量・記事件数を比較すると、1992年は、件数・記事量ともに朝刊が夕刊の約2倍、また、1988年は、記事量で朝刊が夕刊の約2倍であった。

以上のように、朝刊、夕刊でも年によって取り上げられる件数や記事量に差があり、特に1992年は、その差が大きかった。

3) 1982年から1992年までの紙面別記事量

1982年から1992年までの朝刊夕刊の紙面別記事量は、表3に示す通りであった。

朝刊では、「社会面」に朝刊の記事量の31.0%、「総合面」に25.0%とそれぞれ多く掲載され、朝刊の記事量の約6割がこの二つの紙面に掲載されていた。また、出来事の中でいちばんニュース価値が高いと判断された記事が掲載されると考えられる「一面」の記事量は、朝刊の5.2%であった。さらに「その他」の紙面は、朝刊の記事量の23.1%で、記事件数に対して記事量の割合が高かった。

夕刊では、「科学面」に夕刊の記事量の39.6%、「社会面」に32.7%とそれぞれ多く掲載されてい

た。また、朝刊同様「その他」の紙面は、記事件数に対して記事量が多く約2.5倍であった。

以上のように、朝刊では、「社会面」、「総合面」、夕刊では、「科学面」、「社会面」でAIDS記事が多く扱われていた。

4) 1982年から1992年までの地域別記事量

1982年から1992年までの国内の記事量は、12,447.3コラム・センチ、国外の記事量は、8,266.7コラム・センチであった。国内・国外別記事量の年別変化は、表4に示す通りであった。

年別に国内、国外の記事量を比較すると、1992年、1987年は国内の記事が多く、その他の年は、国外の記事が多く扱われていた。特に、1992年の国内記事量は、同年の国外記事量のおよそ3.5倍、1988年の国内記事量は、同年の国外記事量の約2倍であった。また、国内・国外の記事量の年別変化をみると、1986年までは国外の記事が多く、1987年、1988年に国内の記事がやや増加し、1992年に国内の記事が急増していた。

世界の地域別記事量の比較も表4の通りであった。アメリカ地域、ヨーロッパ地域の問題が多く扱われていた。

以上のように、国内・国外別記事量は、年によって違い、しかも国外の記事から、国内の記事へと変化し、特に1992年は国内の報道が急増していた。

表3 朝日新聞 AIDS 記事 朝刊夕刊紙面別記事量

(単位：コラム・センチ)

年	朝				刊				夕				刊				合計
	一面	総合	声	国際	経済	社会	その他	計	一面	総合	科学	社会	その他	計			
1982	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
1983	0	88.6	0	7.8	0	87	11.1	194.5	0	0	58.6	84.5	0	143.1	337.6		
1984	0	18.6	0	5.5	0	10.3	54.3	88.7	0	0	21	16.6	69.6	107.2	195.9		
1985	79.2	166.9	39.3	12.8	0	111.4	81.8	491.4	0	49.3	201.1	232.7	0	483.1	974.5		
1986	0	299.2	7.1	89.8	2.7	121.7	117.7	638.2	0	45.1	243.7	74	83	445.8	1,084		
1987	192.2	793.2	236.9	253.1	36.7	684.5	343.5	2,540.1	260.4	302.8	833.7	1,082.1	396.4	2,875.4	5,415.5		
1988	215.3	491.5	188.6	111.3	129.6	338.5	379.3	1,854.1	113.2	73.7	452.9	283.7	110	1,033.5	2,887.6		
1989	41.5	144.7	0	41	7.4	148.3	0	382.9	0	11.6	280.5	88.5	82.4	463	845.9		
1990	22	173.3	8.5	76.2	0	231.6	88.8	600.4	0	0	481.2	107	6.9	595.1	1,195.5		
1991	0	188.4	28.8	83	43.7	339.3	138.2	821.4	49	8.1	399.1	285.7	133.6	875.5	1,696.9		
1992	63.6	614.7	240.2	79.7	133.2	1,620.4	1,531.5	4,283.3	145.9	64.5	517.3	628.1	441.5	1,797.3	6,080.6		
計	613.8	2,979.1	749.4	760.2	353.3	3,693	2,746.2	11,895	568.5	555.1	3,489.1	2,882.9	1,323.4	8,819	20,714		
(%)	(5.2)	(25.0)	(6.3)	(6.4)	(3.0)	(31.0)	(23.1)	(100.0)	(6.4)	(6.3)	(39.6)	(32.7)	(15.0)	(100.0)			

また、地域別や国別記事量は、アメリカやヨーロッパの記事が多かった。

5) 1982年から1992年までの内容別記事量

1982年から1992年までの内容別総記事量は、表5に示す通りであった。特に、「健康教育・予防対策」は、5,389.2コラム・センチで全体の26.0%、「研究」は、5,066.6コラム・センチで全体の24.5%と、この二つの内容で全体の約50%を占めていた。また「報告」は、件数に対して記事量が多かった。

「健康教育・予防対策」の中で多く扱われていたのは、「教育」、「キャンペーン」、「本、雑誌、TV等の紹介」の内容であった。「研究」の中では、「感染者、患者等の実態・調査・予測」、「治療薬・治療技術」の内容であった。

内容別記事量の年別変化も表5の通りであった。「健康教育・予防対策」に関する内容は、1992年が特に多く、1987年にも掲載されていた。「研究」に関する内容は、何れの年にも扱われていたが1987年がやや多く扱われていた。「制度」に関する内容は、1988年、1987年に比較的多く扱われ、1992年にも扱われていた。「報告」に関する内容は、記事量が多い年に多く扱われていた。「偏見・人権問題」に関する内容は、1987年、1992年に多く掲載されていた。

更に、報道内容の変化を明確にするために、記事量・記事件数が多かった1987年と1992年の記事内容を比較してみた。1987年と1992年は同じ位の記事量ではあるが、1987年の「研究」、「倫理」、「制度」、「経済問題」に関する内容が1992年になると減少し、その分「健康教育・予防対策」が増加しており、その内容に違いがあり、変化していた。

以上のように「健康教育・予防対策」、「研究」の内容が多く、「報告」に関する内容が多く扱われている年に他の内容も多く扱われるという傾向であった。また、年によって報道内容に違いがみられ、「研究」、「制度」に関する内容から、「健康教育・予防対策」に関する内容へと報道内容が変化してきていた。

6) 国内・国外報道と内容の記事量

1982年から1992年までの国内・国外報道と内容

表4 朝日新聞 AIDS 記事 国内外・世界の地域別記事量

(単位: コラム・センチ)

年	国内外別記事量			地 域 別 記 事								
	国内	国外	計	ヨーロッパ	アジア	アフリカ	アメリカ	オセアニア	WHO	世界	日本	計
1982	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1983	108.4	229.2	33.76	11.5	3.7	0	69.7	7.0	6.2	131.1	108.4	337.6
1984	54.3	141.6	195.9	9.8	0	0	55.2	76.6	0	0	54.3	195.9
1985	564.0	410.5	974.5	77.1	7.6	15.2	279.5	6.5	0	24.6	564	974.5
1986	343.8	740.2	1,084	125.1	5.0	174.1	296.8	0	4.5	134.7	343.8	1,084.0
1987	3,078.8	2,336.7	5,415.5	306.3	55.4	130.5	1,491.7	11.8	46.9	294.1	3,078.8	5,415.5
1988	1,966.0	921.6	2,887.6	275.0	72.1	4.6	467.1	4.0	3.7	95.1	1,966.0	2,887.6
1989	406.3	439.6	845.9	43.1	85.6	16.2	239.5	0	23.9	31.3	406.3	845.9
1990	371.6	823.9	1,195.5	145.0	23.3	74.9	407.7	0	53.3	119.7	371.6	1,195.5
1991	781.6	915.3	1,696.9	239.8	192.0	138.1	199.4	7.7	21.0	117.3	781.6	1,696.9
1992	4,772.5	1,308.1	6,080.6	175.6	206.3	17.2	707.2	23.0	6.8	172.0	4,772.5	6,080.6
計 (%)	12,447.3 (60.1)	8,266.7 (39.9)	20,714 (100.0)	1,408.3 (6.8)	651.0 (3.1)	570.8 (2.8)	4,231.8 (20.3)	136.6 (0.7)	163.3 (0.8)	1119.9 (5.4)	12,447.3 (60.1)	20,714.0 (100.0)

表5 朝日新聞 AIDS 記事 内容別記事量

(単位: コラム・センチ)

年	研究	倫理	偏見人権	事故事件	制度	経済問題	教育対策	報告	その他	計
1982	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1983	207.3	3.8	0	7.8	3.4	0	53.0	60	2.3	337.6
1984	55.2	0	5.5	76.6	54.3	0	4.3	0	0	195.9
1985	189.0	0	39.8	44.9	71.5	17.5	347.6	214.4	49.9	974.5
1986	370.6	0	165.2	43.4	73.9	29.4	96.1	252.9	52.5	1,084.0
1987	1,337.3	96.6	383.1	168.9	787.7	207.1	1,205.1	848.3	381.4	5,415.5
1988	678.4	85.2	112.0	130.7	914.7	143.8	335.0	355.0	132.8	2,887.6
1989	283.2	0	114.5	128.1	41.3	59.6	88.4	126.5	4.3	845.9
1990	399.0	23.6	126.6	157.2	138.9	0	272.0	72.0	6.2	1,195.5
1991	538.6	10.4	6.0	178.2	105.5	43.7	326.7	364.1	123.7	1,696.9
1992	1,008.0	0	407.8	248.3	494.3	0	2,661.0	886.7	374.5	6,080.6
計 (%)	5,066.6 (24.5)	219.6 (1.1)	1,360.5 (6.6)	1,184.1 (5.7)	2,685.5 (13.0)	501.0 (2.4)	5,389.2 (26.0)	3,179.9 (15.3)	1,127.6 (5.4)	20,714.0 (100.0)

表6 1982-1992年朝日新聞 AIDS 記事 国内・国外の報道内容の記事量

(単位: コラム・センチ)

年	研究	倫理	偏見人権	事故事件	制度	経済問題	教育対策	報告	その他	計
国内 (%)	2,342.5 (18.8)	113.2 (0.9)	761.3 (6.1)	514.5 (4.2)	2,073.6 (16.7)	226.2 (1.8)	4,320.4 (34.7)	1,572.4 (12.6)	523.2 (4.2)	12,447.3 (100.0)
国外 (%)	2,724.1 (33.0)	106.4 (1.3)	599.2 (7.3)	669.6 (8.1)	611.9 (7.4)	274.8 (3.3)	1,068.8 (12.9)	1,607.5 (19.4)	604.4 (7.3)	8,266.7 (100.0)
計 (%)	5,066.6 (24.5)	219.6 (1.1)	1,360.5 (6.6)	1,184.1 (5.7)	2,685.5 (13.0)	501.0 (2.4)	5,389.2 (26.0)	3,179.9 (15.3)	1,127.6 (5.4)	20,714.0 (100.0)

の記事量については、表6の通りであった。国内では、「健康教育・予防対策」に関する内容が国内の記事量の34.7%、4,320.4コラム・センチを占めていた。次いで、「研究」、「制度」、「報告」の順であった。国外では、「研究」に関する内容が国外記事量の33.0%、2,724.1コラム・センチを占め、次いで、「報告」、「健康教育・予防対策」の順であった。

国内・国外報道の内容別記事量を比較してみると、「健康教育・予防対策」、「制度」に関する内容で国外と国内の記事量の差が大きかった。

以上のように、国内の記事は、「健康教育・予防対策」に関する内容、国外の記事は、「研究」、「報告」に関する内容が中心で、国内と国外の報道内容の違いとして「健康教育・予防対策」、「制度」に差があった。

2. AIDS 報道と他の病気の報道との比較

1991年の AIDS・結核・胃がんに関する記事件数、及び記事量を比較した結果 AIDS に関する記事が圧倒的に多く、結核、胃がんに関する記事は、それぞれ6件、5件しかなかった。しかし、一件当たりの記事量は、胃がんが他の病気の2倍以上あり、大きく取り上げられていた。

以上のように、死亡数・死亡率が高い悪性新生物、その中でも割合が高い胃がんは、一件当たりの記事量は高かったが、年間の記事件数・記事量

は、AIDS に関する報道が多く、我国の病気の現状とは少し違った取扱いとなっていた。

3. AIDS 報道と国民の行動との関係

AIDS 報道と国民の行動との関係を検討するために、年別の記事量と年別の感染者報告数、保健医療機関での来所相談・抗体検査受診者数との比較を行った。なお、ここでの来所相談・抗体検査受診者数は、東京都のデータ（宗像ら1994）を用いた。

まず、感染者報告数であるが、記事量との関係は、図1の通りであった。感染者報告数は、1991年から増加傾向にあるが、記事量は、1987年、1992年が多く、また、記事量が増加した1987年の翌年には、感染者報告数は減少するなど、それぞれ独自の変化を示していた。

次に、来所相談・抗体検査受診者数であるが、1986年から1992年までの東京都内の保健所等で HIV と AIDS に関する来所相談、HIV の抗体検査を受診した人数と年別の記事量の変化は、図2の通りであった。来所相談、抗体検査とも1987年から1990年にかけて減少し、その後1992年にかけて急増するという変化を示し、これは年別の国内の記事量と同様の変化であった。

以上のようなことから、AIDS 報道と国民の行動は、関係していることが示唆された。

図1 年別記事量と年別感染者報告数の推移

図2 朝日新聞 AIDS 記事の年別記事量と相談・受診者数, 抗体検査受診者数推移(東京都)

IV 考 察

1. 新聞に於ける AIDS 報道の量的・質的变化

1) 報道量の変化

AIDS に関する年別報道量は、一定ではなく、しかも、感染者報告数の増加とも関係していないという結果を得た。これは、新聞社の編集方針でニュース価値があるとされる記事が他に多くあり、しかも、様々な読者と階層の人々に対して多様な内容を盛り込まなければいけないという新聞社の経営上の問題からきていることだと考えられるが、ではどの様な時に AIDS に関する報道量が増えるのか、報道量が前年に比して増加した1987年と1992年、及び1985年、1991年を取り上げて検討してみた(図3)。

1987年は、1月18日朝刊に「エイズ初の女性患者 神戸在住 男性から感染し重体」の所謂「神戸事件」がセンセーショナルに、しかもスキャンダラスに取り上げられ、このことに関連する報道が繰り返し掲載されたことと、エイズ予防法案に関する報道が行われた。

1992年は、外国人女性症例の報告数が急増し、日本の AIDS の現状の変化で、3月19日「エイズ匿名検査体制を整備 関係閣僚会議開く 大綱の

一部を改正」や3月3日「高校生にエイズ教材 文部省が作成へ 予防教育に本腰」、5月15日「エイズ対策企業本腰 東商が懇談会設ける」の見出しのように行政や企業レベルで対策がなされ始め、各種団体の活動やキャンペーン、AIDS 教育に関する報道が行われた。

1985年は、ロック・ハドソンの感染・死去の話題や血液製剤対策、1991年は、エイズポスターの話題やフレディ・マーキュリーの死、マジック・ジョンソン感染公表等の報道が行われた。

これらの年の AIDS に関する報道から新聞は、1985年から1991年までのように有名人等のスキャンダラスな事件や話題、1992年のような WHO・エイズ予防財団等のキャンペーンに関わる話題があると取り上げる傾向が強く、各年の AIDS の報道量に影響するものと考えられる。さらにその時に関連する内容も掲載し、しかも読者の反響もあるために話題性の高い事件等が起こった年には、報道量が急増すると考えられる。このようなことから年別報道量は一定しておらず、感染者報告数の増加とも関係していないと考えられる。

ところで、AIDS に関する報道を他の疾病に関する報道と比較したところ、AIDS に関する報道量がいちばん多いという結果を得た。これは、次

図 3 記事量の年別変化と主な出来事

のような要因によるものと考えられる。

第 1 に、現在の治療法の有無である。結核や胃がんは、医療技術の進歩により、早期発見、早期治療が進んでいるが、AIDS については、治療法やワクチンがないために、予防、すなわち正しい知識を持ち危険な行動（不特定多数との性行為）をとらないことが重要視されているからである。

第 2 に、話題性の有無である。他の病気と比較すると AIDS は新しい病気であり、しかも「性」に関わる身近な疾病であるために新聞等のマス・メディアや国民を引きつけやすく、話題性が高いからである。

以上のような話題の取り上げ方や AIDS と他の疾病との比較から、新聞報道を初めとする多く

のマス・メディアは、国民の反響、世論の動向に敏感で、AIDS についての中心的な事件や話題が起こるとそれがそのまま報道量に影響した。これは、AIDS についての国民の興味・関心や意識がそのまま紙面に反映されていることによると推察出来る。

次に、年別報道量に関して、テレビの AIDS 情報に関する宗像 (1992) の報告と本報告とを比較・検討した。宗像は、1991年までの NHK テレビニュース番組を素材にして、日本の AIDS 報道の分析結果を報告しているが、ここではこのうち、1991年までの NHK の報道回数と新聞報道件数とを比較した。

まず、取り上げ始められた年であるが、どちらとも1983年からであった。次に、年別の報道回数、報道件数の比較であるが、どちらとも1985年に増加し、1987年に急増して、その後激減するというパターンを示し、殆ど同じ傾向であった。そして、報道内容であるが、特に報道量が急増した1987年を例として取り上げると、NHK の報道が急増した理由として、神戸事件とエイズ予防法案に関わる話題等を挙げており、これも本研究の新聞報道と同様の結果であった。

以上のようなことからマス・メディアの種類は違うものの、新聞とテレビは同じような公共性の高い報道媒体であるため、年別変化、報道内容には類似性がみられたと考えられる。従って、本研究で明らかになった結果は、他の公共性の高いマス・メディアの AIDS 報道についても一般化出来ると考えられる。

2) 報道内容の変化

我国の AIDS 対策の基本的な方策は、「エイズ問題総合対策大綱」によっている (厚生統計協会 1992)。そして、重点対策として、①正しい知識の普及、②感染源の把握、③相談・指導体制の充実及び二次感染防止対策の強化、④国際協力及び研究と推進、⑤立法措置があげられている。このうち特に重要なものは、国民に対する正しい知識の普及と研究の推進とされている。このことから、新聞において「健康教育・予防対策」、「研究」に

関する内容の報道が多いことは、「エイズ問題総合対策大綱」に則って報道が行われているといえる。また、国内の感染者・患者の多くは、血友病患者であることから、血友病患者への補償等の「制度」に関する内容が多くなっているのも国内の現状に即したものになっている。しかし、1982年から1992年までの11年間を通じてみると、これらの内容は一定量均質に報道されているのでは無く、この間 AIDS に関する報道は、人権問題、経済問題、訴訟問題等他の観点からも報道されている。また、報道内容の中心は、結果に示したように「研究」から、「制度」へ、そして「健康教育・予防対策」へと変化してきている。

そこで、どの様な時に報道内容は変化しているのか、報道内容が変化した1985年、1987年、1988年、1992年を中心に検討した。

1985年は、感染経路の一つが血液であることが明らかになり、血液製剤の対策がなされた。1987年は、神戸事件をきっかけに対策の必要性が高まったことから法的対策として、エイズ予防法案が提案された。1988年は、エイズ予防法案成立と成立に至るまでの血液製剤での感染者への補償対策や人権問題等の対策が検討された。1992年は、異性間性的接触による感染者の急増により、政府がエイズ問題総合対策大綱の一部改正を行ったり、文部省が AIDS 教育を打ち出したりして、対策がなされた。

図4は筆者らが以上の結果をもとに AIDS 報道の流れを示したものである。この図でわかるように大きな事件や話題、感染者の急増等の AIDS に関する問題が表出し、政府や行政の具体的な対応がなされると、その年に報道内容が変化すると考えられる。つまり、報道内容の変化は、国内での AIDS の現状の変化や政府や行政等の対応を示す指標であると考えられる。

ところで、AIDS は、疾病に関する問題でありながら、この間の報道は、多様な内容を含んでいる。

Sontag (1989) は、「まだ十分に正体の分からない、きわめて治療しにくい病気については大体言えることであるが、こうした恐ろしい新種の病気

図4 AIDS報道の流れとその変化

一少なくとも、その疫病性ということでは新しい病気の到来は、病気の隠喩化に大きなチャンスを与える。」と述べている。また、波平(1993)は、「エイズは、病気とイメージとの関わりが深く、そのために、偏見や差別と結びつく病気となりやすい。そして、病気のイメージの拡散と固定化に、マスコミが大きく関与するのである。」と述べている。

かれらが指摘するように、AIDSの病気としての特殊性とマス・メディアから報道されるAIDSにまつわるイメージ、すなわち「死の病」、「恐ろしい病気」、「特定の人の病気」、「罪の病」という概念が相まって、AIDSに関わる人権問題や差別事象、自殺や殺人、強盗等、様々な事件が発生し

たとえられる。また、総理府(1987)の結果にもあるように、一般の人々のAIDSについての情報は、身近の感染者や患者から得られるのではなく、主としてマス・メディアからである。つまり、AIDSは、今日の情報社会の中で生まれ、育った病気とも言える。

以上のようなことからAIDSは、単に感染性の疾病に関する問題であるのに留まらず多様な展開をして、現代の大きな社会問題として存在していると考えられる。そして、そのことが新聞の報道内容の多様化、内容の変化をもたらす原因となっていると考えられる。

3) 国内外情報と朝刊・夕刊の報道

報道量が国外を中心とした話題から国内を中心

としたものへと変化したのは、次のような要因によるものだと考えられる。

第1に、現状が変化した時期の違いである。欧米で感染者が増加し、感染爆発を起こしたのは、1980年代初期であるが、日本に於いて状況が変化し始めたのは、1990年代に入ってからである。

第2に、対策が始められた時期の違いであるが、欧米では、1980年代初期から中期にかけてであるが、国内で対策が始められたのは1987年で、対策が本格化したのは、1992年からである。

このように日本と外国の状況の時期的な違いから1986年までは、国外の話題が多く、1987年からは国内の話題が徐々に増加し、1992年に、国内の話題が急増したものと推察できる。

ところで、国内外情報の年別報道量と、朝刊夕刊の年別報道量は、同じパターンの変化を示している。特に、1988年や1992年に顕著に見られるように、国内の報道が増加すると、朝刊での報道が増加した。これは新聞社が、国外の話題よりも国内の話題を重要視し、国内の問題が大きくなった時に購読者が多い朝刊へ掲載していると考えられる。

以上のようなことから、国内外情報の報道量の変化は、AIDS 報道の朝刊夕刊での取り上げられ方に反映し、朝刊での報道量の増加は、国内の話題の増加、つまり、国内の状況の変化、政府等の対応、世論の高まり等を示しているものであると考えられる。また、日本新聞協会（1992）によれば、近年、朝夕刊セット紙と夕刊単独紙の部数が減り、朝刊単独紙が増えている。従って、朝刊での報道は、国民への AIDS 報道の伝達率に大きく影響するものと考えられる。

2. AIDS 報道の国民への影響

Lupton ら（1993）は、AIDS 報道が国民の態度や行動に影響することを指摘している。本研究では、AIDS に関する新聞報道の件数・記事量と東京都の来所相談・抗体検査受診者数を比較し、新聞による AIDS 報道がこれらの国民の態度・行動に関連していることを示した。これは、新聞が国民に対する基本的な情報提供機関であり、その普及

率と販売部数の高さから、国民への影響力が大きいことによる。総理府（1991）の結果にもあるように、AIDS に関する情報源として新聞を挙げた人は、約80%である。また、AIDS に関する報道が多くなればなるほど、それは AIDS に対する世論を喚起し、警鐘を高める効果を持つことによる。特に AIDS という病気は、その特殊性から不安を掻き立てやすく、そのためさらに AIDS に対する関心・知識も増えると考えられる。そして相談に行ったり、自衛手段を打ったりするという具体的な行動を増加させると考えられる。

ところで、記事量の年別変化と感染者報告数の年別変化には、関連はみられなかった。ここでは、報道量が急増した1987年の翌年に感染者報告数が減少したことについて考えてみたい。1987年は、新聞を初めとする多くのマス・メディアが「神戸事件」をセンセーショナルに、しかもスキャンダラスに取り上げ、人権侵害とも考えられるような報道が繰り返された。また、エイズ予防法案に関わる論議で感染者、特に血友病患者のプライバシーに関わることが問題とされた。このようなマス・メディアの報道とその在り方、及び法的対策の在り方に多くの国民の関心が示され、一方、度が過ぎた報道、現実感のない対策に対して不安と恐怖が惹起された。感染している者、哉るいは感染の不安がある者は、検査を受けず、所謂「地下に潜った」と考えられる。また、一般の国民については、マス・メディアの報道にさらされる恐怖と今までの AIDS に対する認識から、感染の危険があるような行為を慎んだと考えられる。これらが相まって「神戸事件」の翌年、感染者報告数が減少したと考えられる。この結果は、マス・メディアの在り方に示唆を与えるものである。現在の感染者報告数は氷山の一角にすぎないとよく言われるが、正しい感染者数の把握とそれをもとにした対策が行われるためには、感染者の人権が保護されるような報道の在り方が重要である。

新聞報道は、国民に対する基本的な情報サービス機関である。国民への影響力の大きさから、新聞等を初めとするマス・メディアは、その使命感

と責任感を認識し、感染者、患者の人権を擁護しながら、AIDS に対する正しい知識の普及と予防対策に関する報道を継続的に行うことが望まれる。

V 結 論

1982年から1992年の新聞の AIDS 報道の内容分析を行い、以下の結果を得た。

1. AIDS 報道の量的変化は、必ずしも感染者報告数の増加とは一致せず、独自の変化を示していた。
  2. AIDS 報道の質的变化は、未知の病気、原因究明という研究面の記事から、血友病関連記事、そして健康教育・予防対策を含めたより一般的な内容へと変化していた。
  3. AIDS 報道の地域別掲載は、国外の話題から国内の話題へと変化し、しかも日本と政治的・経済的に関係の深い国の記事が多かった。
  4. 朝刊・夕刊での取り上げ方は、朝刊の方がやや多く、1992年に朝刊での取り上げ方が急増していた。
  5. 感染者報告数の増加にも関わらず、中心となる話題が減少すると AIDS 報道も減少してきた。
  6. AIDS 報道の量的な変化と国民の行動の変化は、関連していることが示唆された。
- 情報の受手である多くの国民、なかでも健康教育関係者は、このような新聞等のマス・メディアの AIDS 報道の在り方をよく認識し、マス・メディアや世論に単純に動かされることなく情報の事態に対処していくことが重要であると考えられる。

文 献

- Herzlich, C., Pierret, J. (1989): The construction of a social phenomenon: AIDS in the French Press, *Social Science and Medicine*, 29(11), 1235-1242
- 堀江 湛 (1988): 情報化社会とマスコミ, 有斐閣選書 (東京)
- 厚生統計協会編 (1992): 第3編, 保健, 第3章, 保健対策, 6. エイズ(AIDS), 国民衛生の動向, 39(9), 157-160
- Lupton, D.A. (1992): From complacency to panic: AIDS and heterosexuals in the Australian press, July 1986 to June 1988, *Health Education Research*, 7(1), 9-20
- Lupton, D.A., Chapman, S., Wong, W.L. (1993): Back to complacency: AIDS in the Australian press, March-September 1990, *Health Education Research*, 8(1), 5-17
- 宗像恒次 (1992): 日本人の AIDS 意識と行動に関するマスメディアの影響評価—マスメディア健康教育を考える—, 日本保健医療行動科学会年報, 7, 59-77
- 宗像恒次, 森田眞子, 藤澤和美 (1994): 日本のエイズ, 明石書店 (東京), 25
- 波平恵美子 (1993): エイズは「世紀末の病か」—日本のマスコミ報道の問題点—, 体育科教育, 41(3), 24-28
- 総理府 (1987): エイズに関する世論調査, 月刊世論調査, 10月号, 89-110
- 総理府 (1991): エイズに関する世論調査, 月刊世論調査, 10月号, 2-22
- 富山太佳夫 訳 (1990): エイズとその隠喩, みすず書房 (東京), Susan Sontag (1989), *Aids and Its Metaphors*, Straus and Giroux (New York)
- 辻村 明, 高木栄作 (1987): 報道新聞 (医療記事) の内容分析, 医療と社会, 日本評論社 (東京), 167-210
- 山本 明, 藤竹 暁 (1987): 図説. 日本のマス・コミュニケーション, 日本放送出版協会 (東京)
- (受稿 1994.3.17; 受理 1994.10.7)